1.悪性腫瘍・臨床統計

[P01-19]当科における顎口腔領域の転移性癌の臨床的検討

〇梶田 倫功[1]、北村 淳[1]、宮下 仁[1]、野上 晋之介[1]、山内 健介[1]、永井 宏和[1]、高橋 哲[1] (1.東北大学大学院　歯学研究科病態マネジメント 歯学講座顎顔面・口腔外科学分野)

ポスターを表示

【緒言】顎口腔領域における転移性癌は口腔悪性腫瘍全体の約1～2%程度と言われ，稀とされている．疾患の認知度が低いため発見が遅れることが多く, 口腔転移巣を認めてからの予後は大部分が１年以内とされている.【対象と方法】2014年4月から2019年12月までに東北大学病院歯科顎口腔外科を受診し，口腔悪性腫瘍と診断された398例のうち，他臓器から顎口腔領域への転移性悪性腫瘍と診断された5例(1.26%)とした．評価項目は年齢，性別，原発腫瘍の部位，組織型，治療や転移までの期間, 転移巣の部位，治療法，予後とした.【結果】内訳は男性が4例, 女性が1例で, 初診時の年齢は44から78歳(中央値が50.4)であった. 原発巣は肺が2名, 腎臓が2名, 乳房が1名であった. 口腔内の転移部位は上顎骨が1名, 下顎骨が3名, 上下顎骨が1名で口腔転移巣が発見されてからの生存期間は１か月から22か月であった. 原発巣の治療は手術療法が1例, 手術・化学療法が2例, 治療なしが2例で口腔転移巣の治療は, 手術療法が1例, 化学療法が1例, 治療なしが3例であった.【結語】がん治療の成績向上と担癌状態での生存期間の延長により，今後は口腔転移性腫瘍と遭遇する機会が増える可能性がある．迅速で的確な診断と予後， QOL向上のための適切な治療法選択のため, 長期の経過観察と症例数を重ねることが必要と考える.

©一般社団法人 日本口腔腫瘍学会